琉球大学学術リポジトリ

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 登美子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44538

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

「日本語IVC」担当　加藤　登美子（グローバル教育支援機構）

はじめに

この度はとても光栄な賞をいただき本当に嬉しく思っております。このような栄誉は自分には縁のないものだと思っていましたので、授賞の連絡をいただいたときは、唯々驚きました。今回の賞をいただけたのはひとえに留学生たちをはじめ、諸先生方や関係者の方々のおかげだと感謝しております。本当に素晴らしい留学生たちに恵まれ、助けられました。受賞を機に、自身の講義を振り返り講義内容などをまとめましたので、ご紹介いたします。

講義内容

「日本語IVC(03 組)」は留学生に開講されていた作文のクラスです。現在はカリキュラムが改革されたため同じ科目名は存在しませんが、クラスにはスウェーデン、アメリカ、ボリビア、タイ、フィリピン、インドネシア、中国、韓国、台湾からの初中級～中級レベルの学生がいました。

授業では、毎回なるべく 2～3 種類の違う活動を準備しました。担当したクラスは作文のクラスですが、場合によっては単調でつまらない授業になってしまう恐れがあるため、書く前にとにかくよく考え、よく話し、最後に自分の言いたいことを書かせるという内容にしました。最初のころは教科書を使ってその中で学生の興味がありそうなトピックを選び、そのトピックの関連語彙を学習、トピックについてペアやグループでディスカッションをし、ブレインストーミングしたうえでトピックについて改めて書く、という作業をしていました。この時の問題は教師自身が考えて学生が興味を示すだろうと思うトピックを選択したわけですが、これが学生によっては全く反応が違ったのです。学生 A は大変興味を示し、学生 B は全く興味がないといった具合です。その後、学生自身にトピックを決めさせるということも考えましたが、そこでまた問題が起こりました。自分自身でトピックを決めて書きたい学生もいれば、トピックが全く思い浮かばないという学生もいました。このときにどの学生も興味をもって取り組めるトピックはないものだろうかと悩みました。そして考え付いたのが、学生が必ず考えなければならない自分に関係がある問題や、逆にいままで深く考えたことがないことを考えさせるということです。例えば、「どうして勉強しなければならないのか、と小学生に質問されたときにどう答える？」「人生の中で大事なことはなんだろう？順位をつけてみよう。」などです。そのことを自問自答し、グループで共有して話し合い、ほかの人の意見を聞くことで出来上がった自分なりの答えを文章にして書かせました。また、異文化理解として留学生が置かれている状況や現実に起こった問題点を聞き出してそれについて話し合い、自分なりの解決策について書かせてみました。そういった活動をすることで教師が見えていない留学生が抱えている現実の問題を知ることができました。またそのことを授業で話すことで、同じような問題を抱えている学生が自分だけではないのだということが発見できたり、自分にも起こり得る問題だと真剣に考えたりすることでクラスメートとも本音で話すことができ、クラス全体でトピックについて真面目に取り組むことができたと思います。そして、自らが抱えている問題を話し、クラスメートと共有することで段々とクラスメートとの距離が縮まっていきました。

「日本語IVC(03 組)」クラス

クラスが仲良くなることで、教師自身も大変助けられます。実はこのクラスは、初めは決して教えやすいクラスではありませんでした。最初のころは全体的におとなしいクラスで、学生の個性があまり感じられませんでした。そんなクラスの中に自分を否定的に捉えてしまい、すぐに自分を責めてしまう学生がいました。この学生は自分を表現することが下手で、特に作文が苦手でした。授業内で何か書かせるときには、いつもこの学生だけがペンを持ったままほとんど何も書けずにいました。また、自分の意見を発表することも苦手で、発表する順番になったときに何度か教室を飛び出してしまったことがあります。最初のうちは授業後に声を掛けて励ましたのですが、自分を責めるばかり

でどうすることもできませんでした。彼は落ち込みが激しいときには近寄ることも難しい状態でした。

そんな様子を見てクラスメートも声を掛けるのを恐れていたのですが、クラス全体が仲良くなるにしたがって、学生たちの中にも彼をフォローしてくれる学生たちが出始めました。「できない」という彼にクラスメートが「大丈夫、できるよ」と声を掛け、一人が彼を励ますと、他のクラスメートたちもそれから彼を励ますようになりました。

しばらくして、彼は自分のペースで課題に取り組むようになりました。時間内にできなくても、提出期日を過ぎても必ず最後には提出しました。顔の表情もどんどん明るくなり、自分から意見を言ったり、冗談を言ったりするようになりました。学期の後半には、自ら進んでクラスの食事会を取りまとめる中心人物になっていました。そしてクラスメートとの絆が深まり、みんなが頑張ろうという気持ちの溢れたクラスに成長しました。

授業で大切にしていること

この賞をいただいたことをきっかけに、自分なりに授業で心掛けていることを考えてみました。筆者がいつも授業で心掛けていることは、①笑いがある授業　②クラスの「和」　③メリハリのある授業です。クラスの雰囲気が悪ければいくら楽しい授業を心がけても学生たちは楽しくないでしょう。いくらクラスの雰囲気が良く、仲が良くても笑いのない授業では盛り上がりません。そして、メリハリのない授業では 90 分集中することは難しいと思います。これらは基本的なことですが、なかなか毎回成功することではありません。1 学期間という短い時間ですが、クラスを盛り上げることでクラスの絆が深まり、初めは自分のことで精いっぱいだった学生たちがお互いを思いやり、助け合ったりするのです。今回の「日本語IVC(03 組)」の例もまさしくクラスづくりに成功したおかげで学生たちが自分の力で気持ちをひとつにできたといっても過言ではないでしょう。そのようなことから、筆者はなるべくファシリテーターとして学生を尊重しながら学生自身がクラスの雰囲気を和やかにしていけるような環境づくりに力を入れています。

留学生は、世界中の国から同じ時期に留学し、日本を選び、日本の中の沖縄にやってきて、琉球大学の同じ教室で机を並べ、日本語に取り組んでいます。それは偶然の出来事で、場所はもちろん、来日する時期やクラスが違うと出会えないかもしれません。まさしく「一期一会」の世界です。そんな貴重な時間を大切にし、出会いを大切にできるようなクラスづくりをしたいと常に考えています。長い人生においてのほんの短い期間かもしれませんが、留学というのは学生の人生観や価値観を変えてしまうほどの影響力があるものです。留学生の人生においての貴重な時間に関われることを大変光栄に思います。

最後に

今回はこのような賞をいただいたことで講義内容などについて書きましたが、実はいまだに日々試行錯誤しています。例えば、毎学期同じ科目を担当することになっても全く同じにはしないで、新しいことを授業で試すようにしていますが、これはひとつのチャレンジで下手をすれば失敗してしまう可能性もあります。毎回同じ授業をすればリスクが減りますし、準備もかなり楽になります。新しくチャレンジする内容はその都度うまくいくとは限らないのですから、学生のためになっているのかどうか不安になるときもあります。毎学期悩みは尽きませんが、それでも常にチャレンジャーでありたいと考え、今後も試行錯誤しながら頑張っていきたいと思います。また、この賞をいただいたおかげで自分自身の講義について振り返ることができたことは大変実りある事でした。この度の名誉ある受賞に際し、改めて感謝の意を表します。